

3つの8000m 峰登頂

1994年秋、日本大学山岳部OBが関係する3つの登山隊が、8000メートルにトライした。チョー・オユーに出かけた、1995年のエベレスト北東稜隊の高度順化のためのプレ登山隊を除き、他の2隊は、50歳以上でダウラギリを目指したシルバー・タートル隊と、還暦を迎えた宮原巍氏によるエベレスト東南稜隊である。

これらユニークな2つの隊を含む3隊に寄稿をお願いした。



エベレスト南峰コルの宮原隊長

八月二十七日、ベースキャンプを建設。今年は私たちの隊(宮原・貫田エベレスト・エキスペディション)のほかに、英国エベレスト・メディカル・エキスペディションの大部隊が入っていた。その英国隊と私たちの隊の登山許可の枠内でフランス隊五名、ポルトガル人一名、インドネシア隊二名、それにローツェを目指すスイス隊と国際隊が入っており、ベースキャンプは国際色豊かな賑わいを見せていた。

私たちの隊は、隊長・宮原、副隊長・貫田、隊員はシェルパ十四名といったニュアンスの隊であった。

九月十日、英国隊のハンドリングのトレッキング会社であるタムセルク・往復。この日はかなりの降雪があり、往復十時間を要した。再出発は十六日、

トレックの主動でアイスフォールのルート工作終了。ローツェ・フェイスのルート工作は、私たちと英国、フランス隊のシェルパのローテーションで約五日をかけ、九月二十五日には終了した。当初私たちは、九月二十八日を登頂日に予定していた。しかし、九月二十日まではほとんど毎日少量の降雪があり、ぐずついた天気であったため、アイスフォールのルート工作は大幅に遅れ、私たちのすべての日程が約一週間ずれこんだ。

九月十二日、初めてアイスフォール

エベレストの登頂を目指して

宮原 巍



1995年(平成7年)

2月号(No.597)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

3つの8000m峰登頂

エベレストの登頂を目指して… 1	
シルバー・タートル隊のダウラギリ主峰登山…………… 2	
チョー・オユー登山…………… 4	
自然保護随想…………… 4	

報告	
山日記の一生…………… 5	
旧制浪速高等学校の山…………… 5	
秩父・金峰山～国師岳…………… 6	
茶臼山・美ヶ原高原ホテル…………… 7	
東西南北	
名誉会員に推薦されて…………… 8	
マッターホルン登頂記…………… 8	
俳句・鎌倉アルプス…………… 10	
玉山登山…………… 10	
ウエストンと箱根の大地獄…………… 10	
詩・神々の座…………… 11	
会長への手紙…………… 11	

海外の山…………… 9	
図書紹介・書籍受入報告…………… 13	
支部だより	
福岡 熊本 関西 山形…………… 14	
創立90周年記念事業募金応募状況16	
海外情報…………… 16	
新入会員・住所変更…………… 17	
INFORMATION・ルーム日誌…………… 18	
会務報告…………… 19	

▶日本山岳会事務取扱時間	
月・火・木・土曜日	10～20時
水・金曜日	13～20時
▶図書室開室時間	
日曜・祭日・月曜日を除く毎日	13～20時

十七日CⅡまで登り、十八日CⅡ上部の偵察。二十日にベースキャンプに下り、その後パンボチェまで下りて休養する。

九月二十八日、再度ベースキャンプに入り、翌日から頂上を目指して登攀を始める。CⅠ、CⅡに二泊、そしてCⅢに入ったのであるが、強風のためCⅢでさらに一日滞在し、いったんCⅡに下った。今年の天気は九月二十一日頃から、山の上ではモンスーンの影響が薄れて天気がよくなり、九月二十九日まで、上部でも風のない好天に恵まれた。そして九月三十日から冬型の天気となり、高所ではジェット・ストリームが吹くようになった。皮肉にも私たちは、好天の間パンボチェに下り休養、二十九日、好天ではあったが風が吹き始めた頃、本格的な登攀を開始したことになる。最初この風も四、五日でおさまり、私たちがサウスコルに着く頃、また風のない秋の好天がくるであろうと予想したのだが、結果的にはこの風が十日間続くこととなった。

ともかく十月五日、CⅢへ、そして翌六日サウスコルにCⅣを建設し、そこにいった。しかしテントを張っている最中に、一時中断していた風がまた吹き出し、以後新しいテントをも裂いた強風が九日の明け方まで続いた。この風と数日間もの停滞のため、八五〇

〇メートル地点でのCⅤの建設は不可能となり、そればかりでなく九日には、登頂をあきらめて下山すべく覚悟をしていた。

ところが九日未明、突然風が弱まった。同時に朝十時頃、東京から気象情報を送ってくれていた当会員の大森弘一郎氏から、今まで吹いていた時速五〇〜六〇ノットのジェット・ストリームが九日、十日は弱まりそうだという連絡を受けた。私たちは急遽下山をやめ、宮原、貫田と六名のシェルパはサウスコルから一気に頂上を目指すことにした。

早速酸素の点検を始め、登攀準備を終え、夕方から仮眠。夜の九時に起き、十時四十分出発、トーチライトを頼りに登攀を開始した。八五〇〇メートルのCⅤ建設予定地を三時間で通過し、快調に登攀を続けたのであったが、宮原は高度八六〇〇メートル辺りより右目がかすみ始め、やがて全く見えなくなるという故障のため、八七九三メートルの南峰でリタイア。貫田は登攀を続け、登頂に成功した。

南峰の手前八七〇〇メートル近くで、空が白み始め、遠いチベットの地平線上横一文字に、茜色となる夜明けは荘厳そのものであった。

高所登山の経験のあまりない宮原が、あの高地まで行けたのは、次の二つの

事柄によるところが大であると思われる。その一つは最近登山を重ねているシェルパの人たちの技術がかなり高い水準にあること。その二は、六十歳という年齢を考え、無理な高度順化を行うよりも酸素を十分に使った結果であると思う。

今回の酸素使用量は、行動時、ローツェ・フェイスの基部より毎分二リットル、CⅢより三リットル、CⅣより

シルバー・タートル隊の ダウラギリ主峰登山

池田 錦重

三年前、チョー・オユー峰が案外あつてなく登れてしまったことから、次はもう少し手応えのある登山をしたかった。そのようなことで、ネパールの中央部に将棋の駒を立てたように威風堂堂とそびえるダウラギリ主峰（八

一六七メートル）を選んだ。登山は一般ルートと呼ばれる北東稜から頂上を目指し、隊員はチョー・オユーの元メンバーに小西氏が新たに加わり、総員七名の五十歳を超えた仲間たちである。

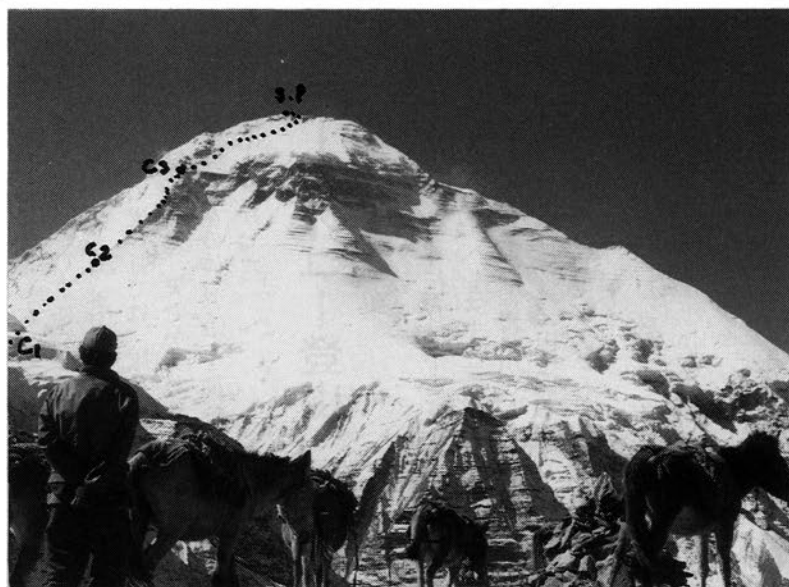
八月二十三日、二十七日の両日、それぞれに分かれカトマンズに飛んだ隊員は、荷の輸送を陸路シェルパに任せ、二十九日空路ジヨムソンへ飛んだ。こ

は四リットルを使った。睡眠用ではCⅠで〇・五リットル、CⅡで一リットル弱、CⅢで一リットル強、CⅣで一・五〜二リットルであった。

登攀期間のブロックおよびクレバスの崩壊はアイスフォールで四回、ローツェ・フェイス基部で一回、雪崩は三回ほどであったが、幸運にも私たちはそれに巻き込まれることはなかった。

こでマルファ（二二〇〇メートル）に居を構え、キャラバン隊の到着を待つ間、全員高度順化に汗を流した。

九月四日、キャラバン隊（ミュール七十七頭、ポーター四十五名）とともにダパコル（五一〇〇メートル）を越えてヒドンバレーへ向かった。八日、フレンチコル（五三〇〇メートル）を越え、全荷物とともにマヤンディー・コーラの源流四六五〇メートルのモレーンの上にBCを建設した。このキャンプ地は、すでに日本の岩手隊、スイス隊、国際隊が入り、上部キャンプの荷揚げに励んでいた。目前の北東稜のコルから流れ出したアイスフォールは、氷の



フレンチコルから見たダウラギリ主峰、点線は北東稜ルート

状態が悪く、アイガー岩壁下部にルートをとっている岩手隊のルートを使わせてもらう。このルートは日中は雪崩と落石の危険があるため、早朝だけの行動とした。

九月十七日、北東稜のコル(五七〇メートル)にCⅠを建設し、二十二日には全員CⅠに入った。翌日からCⅡ建設の荷揚げ、順化行動がはじまり、二十四日にはCⅡが六六五〇メートル

の大クレバスの中に設営された。この北東稜は降雪があれば、どこも雪崩が出てもおかしくない雪の斜面だが、このクレバスのキャンプだけは安全そうだ。

二十五日、休養していると、岩手隊が登ってきて、これから上部にキャンプを作り、アタックするという。また、この日スイス隊と国際隊が頂上へ向かい、午後一時頃スイス隊のテントから

歓声が上がった。われわれもこの日、七二〇メートルまでフィックスが終り、今後の予定を検討することになった。CⅡからの報告では、七三〇〇メートル辺りの雪稜を切れば

キャンプが作れるという。しかし、この位置では当初予定していた場所より二〇〇メートル低いが諸般の事情を考え、ここを最終キャンプとし、アタック体制に入ることにした。

岩手隊によれば登頂時期は「鶴の渡り」がはじまる前が一番

よいという。シェルパたちは「ラマ・カレンダー」なるものを持ち出して九月末日までが一番よいという。そのようなことで上部キャンプへの荷揚げ、最終キャンプCⅢの建設予定を勘案すると、アタックは早くても十月一日となるが、これでは隊員の順化が十分でない。しかし、この好天を逃せば元も子もなくなる恐れがあるので、順化不足はCⅡ、CⅢの睡眠時に酸素を使うことでカバーしようと考えた。

九月二十九日、隊を二分し、石川、小西、渡辺、池田、根津とシェルパ三名を第一次アタック隊とし、状況を見て遠藤、シェルパ二名で第二次隊を組むことにしてCⅠを出発した。各自マイペースで歩き、正午過ぎにはCⅡに入り、夜は毎分二リットルの酸素を睡眠用を使用した。

三十日(快晴、気温マイナス一五度C)、日の出とともに歩き出す。ここからCⅢまではフィックスにつかまりながら登り、途中七〇五〇メートル地点でスイス隊、国際隊のテントを横に見てロープをたどると、稜線から斜面にせり出すようにテントが張ってあった。ここが七三〇〇メートルのCⅢである。この夜は、早い夕食をとって寝たが、夜半から地吹雪となり、風がテントを激しく叩くようになる。

十月一日、気温はマイナス二〇度C

以下であらう。午前〇時に起き、簡単な食事を済ませ、二時にヘッドランプを点けて出発する。隊員はロシア製の三リットル・ボンベにレギュレーターを取り付け、毎分二リットルで歩きだす。シェルパは酸素なしである。七五〇〇メートルまで稜線を登り、そこから岩稜を巻くように右手の雪田に入る。岩稜沿いに他隊の固定ロープを見ながら稜線直下まで登り、ここから夜

が明け、大雪田上部の急な斜面をトラバース気味に登り続ける。時折強い風が吹いていたが、日の出とともに落ち着く。山頂近くに一本、急なクロワールが稜線まで突き上げており、この中に前の隊の足跡が残っていたので、ここを目指す。九時半頃、ニマ・テンバ

が「今日の行動は十二時までで打ち切りたい」といつてくる。同意してさらに進む。トップのニマ・ドルジェは難しいところになるとお経を唱え、経文を刷った紙を撒いている。トラバースはアイゼンがよくきき、思ったほど時間がかららずクロワールに達し、簡単に稜線に出た。頂上は、四〇〇五〇メートル戻るように緩い雪面を登ると、そこにあった。十一時少し前であった。

稜線は風が強く、早々に記念写真を撮ったあと下る。クロワールの降り口にロープを一本固定し、全員懸垂で下る。あとは大雪田を一直線に下り、午

後二時二十分CⅢに帰幕した。われわれは隊長とシェルパをCⅢに残し、そのままCⅡまで下った。途中遠藤が登ってきた。この夜CⅢでは、隊長と遠藤が話し合った結果、天気が変わりだしたこと、彼女の体力などを勘案して登山は中止になった。

チヨー・オユー登山

本登山隊は、一九九五年春に予定されている日本大学エベレスト登山隊（北東稜よりの完登）の準備登山として実施された。隊員は体育会山岳部および各学部の山岳部の学生および若手OBより構成された。

登山隊は、八月二十六日にカトマンズを発ち、途中で高所順応登山を実施しながら、九月八日には予定通り標高五七〇〇メートルの地点にBCを建設した。その後、雪崩の危険を回避するため、標高七一〇〇メートルに建設したCⅡの移動を行ったりしたため、計画は予定より多少遅れたが、標高七七〇〇メートルのCⅢより九月二十九日に第一回目のアタックを行い、井本、原田、シェルパ二名の計四名が登頂した。

続いて、十月四日に隊員四名、シェルパ三名の計七名が、第二回目のアタ

CⅠに下り、初めて鶴の渡りを見た。頂上には雪煙が上がり、上昇気流が湧き、上層の風に翻弄されながら南に飛ぶ鶴の列を見ていると、これでわれわれの登山は終わったという気がした。キャンプ周辺の気温は日毎に下がり始め、冬がそこまでやってきていた。

深瀬 一男

ックを行い、田端、笹原、シェルパ三名の計五名が登頂し、他の三名は、標高約八一〇〇メートル地点から引き返した。第一回目のアタックのときは、快晴無風の好天に恵まれたが、十月一日頃から偏西風が吹き始め、第二回目のアタックのときには風が強く、出発時間を遅らせたため、日暮れまでに笹原はCⅢに帰着することができず、CⅢの上部の標高七九〇〇メートルの地点にビバークを余儀なくせざるを得なかった。翌五日に、CⅢより二名で笹原を救出し、六日にBCに収容した。今回は、四名の隊員と五名のシェルパが登頂したものの、第二回目のアタック時のビバークと、その救出時に三名の隊員が手足に凍傷を負う結果となり、エベレストの準備登山としては、多くの問題を残した登山であった。

自然保護随想

ペットボトルリサイクル

関塚貞享

厚手のセーターや羽毛服に代わって、ポーラテックス、アルマデラなどフリースと称する薄手の毛布と見紛うような生地で作った冬山用衣料が出回ってから数年が過ぎた。

ごく細いポリエステル繊維の断面が蓮根のように穴があいていて、その穴の空気が抜群の断熱効果を持つ新素材繊維の衣料は、軽くて暖かそうで、ちょっと興味があつたが、登山用具店で売っているこれらのフリース衣料は、まがましい色づかいで買う気がおきなかった。

ところが、昨年の暮れに普通の洋品店で、深みのある濃紺一色のフリースのジャンパーを見つけ、着てみると軽くて暖かい。これこれとばかり早速手に入れて、ついているラベルを見るとペットボトルのリサイクル繊維で作ったとある。

ラベルの説明を要約すると「米国内では一時間に二百五十万本のペットボトルが捨てられ、その七五パー

セントが埋められてきた。いまや、これらボトルを繊維に再生して着始めるときだ。このフリースは「バージンポリエステルーパーセントをコアに、八九パーセントのリサイクル繊維を混ぜて織りあげた」とある。米国ではフリースはペットボトルのリサイクルが当然の時代となることを予感させている。またショイナードは登山用品の定価の一割を環境団体に寄付する販売戦略で、米国の売上げを誇っている。

ドイツでは、ペットボトルは回収して何回でも使えるように厚手に造られており、人々はリサイクルで曇りガラスのようになったボトルを、透明なボトルより先に、当然のように買っていくという。これらの事実は大衆運動として環境問題が完全に根付いたことを示している。

日本でもボトルのリサイクル繊維のフリースを登山用具店で売っているが、一割ぐらいい高いバージンポリエステルをフリースを買っていく人が多い、という。

ボトル飲料でも、透明なボトルは売れるが、リサイクルで曇りガラスのようになったボトルは、なかなか売れないのではないか。日本の環境運動は、まだ啓蒙時代といえよう。

第二回山の本シリーズ

三田の一生

図書委員会

今回は半世紀にわたって発行され、登山者に親しまれた日本山岳会編集の山日記について、十月二十一日、元山日記担当理事の松丸秀夫氏と戦後から



山日記を語る、左から坂本、松丸の両氏

の発行元の坂本矩祥氏に「山日記の一生」と題して話していただきました。

最初に松丸氏のお話。一九三〇年に発行された第一号は非常に気合いが入っていて素晴らしく、山日記が名声を得られたのもこのためであると思う。ウエストンがロンドン・ライブラリーの一冊の中で山日記を誉めている。

山日記第一集の創刊の言葉には山日記の内容が、①登山者に有用な伴侶であること ②登山の発展と山を静かに美しき心の故郷として保つため ③日記帳、と書かれている。②のアルピニズムの鼓吹のところは山に登る人のためにという標題がつけられていて、名文が続き、理想主義的な精神の問題に入っていて、時代にもマッチし、山日記の名声もこの部分によると思う。

案内人のことが初期の山日記にとって重要な役割だった。山小屋、行程表は山日記で便宜を得たという話に出るが、情報化時代になると調査記事で類書に差をつけることはむずかしくなってきた。また遭難信号や雪崩対策などに見られるように、ヨーロッパの最新の高いレベルの登山の知識がどんどん盛り

れていることも魅力の中心になったのだと思う。

戦後、昭和二十八年のマナスル登山を契機に日本山岳会の世の中が変わった。それについては、桑原武夫さんが山日記のしおりの中で「アルピニズムは理想主義的、空想的、詩的であり、それに対し遠征は現実主義でなければならぬ」と書かれている。アルピニズムの時代からマナスル時代に移った。山日記も時代の変化を感じて登山の注意というアルピニズム鼓吹の文章はなくなる。その代わり戦前と戦後の装備を比べたもの、山の小辞典、民謡、山と人、などが載り、内容がレベルアップした。しかし山日記はだんだん売れなくなり、一九八九年に五十三集で休刊になった。

顧みて、どうして休刊という運命になったかと考えると、時代の趨勢への対応の仕方ではなかったかと思う。きたるべきは大衆化の時代とは分かっているが、期待して試みた路線への市場の反響は冷たかった。山日記は売らなければならぬ独立採算なので、それはストレートに死命を制した。大衆化の中にもちりばめようと考えた光輝くものが、やはりアルピニズムであったのがいけなかった。したがって山日記は日本のアルピニズムとともに成長し、ともに消えたといえる。

続いて坂本氏からは、初期の山日記が気合いが入っていることが本の造りにもよく出ていることや、戦後のものがない時代の山日記作りのこと、松方三郎さんから口絵などに絵を随分貸していただいたことなどが話された。参加者二十名。(三栖寿生)

第二十三回山岳史懇談会

『旧制浪速高等学校の山』

図書委員会

旧制浪速高等学校の山岳活動を語る夕べは、十二月八日、講師に今西壽雄氏、徳永篤司氏を迎え、ルームで行われた。最初は、今西氏が高等学校に入学された昭和八年から卒業するまでの活動を、その後を徳永氏が引き継いで語られた。

浪速高等学校は七年制の学校であり、特徴として、上級生と下級生の間には、戦後の大学山岳部にありがちな、上意下達、学年間のへだたりがあまりなく、合宿にはOBである大学生も参加して、リーダーより偉い人たちがたくさんいた。それに下級生は尋常科の子供たちもいるので、自然に下級生をいたわる風習もでき、随分となごやかな雰囲気であった。ちなみに同じ関西の七年制の高校、甲南高校では、上



当時の活動を語る今西(左から2人目)、徳永(同3人目)の両氏

級生をあだ名で呼び捨てにしたりしていたし、OBの大学生も参加して、尋常科の生徒を山に連れて行ったりしていた。その分下級生はなにかにつけて老成しており、山の知識や技術においても、他校から来た人たちよりも優れていた。

今西氏が入学されたときも、尋常科から上がった中村英碩氏が先生役になり、近くの六甲や道場、不動岩などで技術を磨いていた。ただ学校当局の山に対する理解は薄く、部費を捻出するのに苦労し、関西学生スキー連盟の大会に出場する名目で、部費を獲得

得、それで登山用具を購入した。その見返りに、ほとんど経験もないのに競技会にかり出され、転びつまろびつしながらも二位に食い込んだエピソードも披露された。山での活躍は主として後立山連峰で行われ、白馬岳から鹿島槍、カクネ里、荒沢北壁へと活動の場が移っていった。

当時鹿島槍ヶ岳には、京大、早大、立教、神戸商大、関学、甲南など多くの山岳部が入山し活動していて、人的交流も盛んだった。その中で浪速高校も、荒沢やカクネ里の登攀に活躍していた。一方で痛ましい遭難事故も起こったが、部の活動は止むことなく続き、昭和十一年には済州島の漢拏山へ、関西学生山岳連盟の一員として、今西氏が参加、登頂されている。

この頃から登山界では海外の山にも目が向けられ、千島、樺太の山々へも出かけるようになってきた。立教大学がナンダゴットに登頂したのもこの年であり、これから二十年後、今西氏のマナスル登頂により、わが国初の八千メートル峰登頂の記録が打ち立てられた。その後多くの後輩に恵まれ、部の活動は続き、終戦を迎えた。しかし、佐谷健吉氏のいち早い復員、復帰活動により復部。最初に目指したのが、今西、中村氏らが活躍した鹿島槍ヶ岳、荒沢北壁であった。

部の活動は大阪大学山岳部に引き継がれ、今日も活躍を続けている。ざっとこのような要旨説明の後、懇談会は雑談形式に移り、和やかな一時を過ごしたが、両氏の帰阪時間が迫り、八時半散会した。参加者二十三名。

(飯田 進)

秩父シリーズ 金峰山・国師岳

三水会

恒例の秩父シリーズ、今秋は十月八、九日、「金峰山・国師岳」を企画。参加者九名。例年よりかなり遅れて、ようやく色づきだした紅葉を楽しみながらのビスタリー山行だった。

とはいえ、連休とあって出発から大混雑。午前八時新宿発の列車はもちろん、小淵沢乗り換えの小海線は乗客があふれて、十数分も発車時刻が遅れる。ありさま。信濃川上駅から梓山を経て金峰山荘まで「特別仕立て」の村営バスは登山姿でぎゅう詰め。十文字、金峰山をはじめこの辺りのコースは、近ごろ年配の登山者がにわかに増えていることを実感する。

金峰山をホームグラウンドとして今年もすでに四回目とかいう高田真哉さんの時間配分を心得た案内で、西股沢出合いから金峰山小屋までゆっくり

ゆっくり、登り着いたら驚いた。改築の後広くなった小屋もすでにいっぱい。その夜は百八十人の収容人員で、近年珍しく魚市場の魚とあいつって寝る。

翌朝は、夜半過ぎまで激しい音をたてていた風雨も上がり、晴天とはいかないまでも見晴らしは上々、富士はもちろん、南ア、北ア、乗鞍岳の向こうには御嶽山も見渡せる。「ホラ甲斐駒、アツ北岳も見える！」と声も弾んで金峰山頂上へ出る。山頂で五丈岩を背に写真を撮り、露岩を越してサイの河原でしばし遊ぶ。朝日岳を間近に、甲武信岳、三宝……と遠く望みながら国師岳へ向けて歩を進める。鉄山の巻き道近くになると、大弛方面からの登山者と出合うようになる。今日もだいが登ってくるようだ。

この辺りからさすが秋色も濃くなってきた森林帯を下り上りし、朝日岳に着くころ、心配していた空模様が怪しくなりだす。富士山が笠雲で見えかくれしだすと、遠くまで開けていた山々は次第にかすみだし、最後の展望となる。一路国師岳山頂へ。ここは一等三角点である。それを確かめると、いま登ってきた道を引き返し、左手の樹林帯を登って北奥千丈岳にたどり着く。奥秩父最高点(二六〇一メートル)の北奥千丈は、小雨混じりの風の中であった。記念撮影もそこそこ大弛小

屋へと向かう。奥秩父特有の苔むした原生林の幽寂さにひたってゆっくりと歩く。雨も上がったようだ。

戦後の昭和二十二年大弛小屋に泊まって以来だという小林碧さんは、記憶をたどりながらしきりに懐かしんでいる。

と、急に眼前が拓けて、小屋の近辺は自家用車がずらりと並んでいた。小屋から続く「夢の公園」を散歩して、再び展望を楽しんで戻ってくると、予約してあったタクシーの出迎えとあいなり、道路拡張工事の道をいとも楽に（昔を思えば何たることか！）一同塩山へ、無事反省会会場（？）を確保することができた。

第四回赤シャツ懇親山行

茶臼山・美ヶ原高原ホテル

土曜会

五月二十八日、中央線の最高地点九九五・二メートルの富士見駅を越える、すっかり天候が回復してきた。車窓西方に昨年の集い・入笠山が望まれる。十時、松本駅で山の仲間と再会する。まずは車で松本市山岳博物館を訪れる。近代登山のはじまりから、海外遠征に至る発展史と合わせて、登山用具、スキー用具の展示品を興味深く見

学した。館内にて昼食をとり、再び車に分乗、今夜の宿泊美ヶ原高原ホテルに向かう。右、左と次第に高度を上げること一時間余にて美ヶ原高原にやってきた。日は長い。軽装で最高峰王ヶ頭二〇三四・三メートルを目指す。何となく「空は青く、山は遠く」と、口ずさみたくなるような草原の真っ只中を歩む。

しばらく緩やかな傾斜をたどって行くと、先行されていた坂倉さんが、後続のわれわれに手を振り知らせしてくれる。何かあらん、左の沢に一頭のカモシカを発見。直線距離にして三〇〇メートルはあるのか、今自分たちが歩いて来た道に向かって駆け上がった。そのうち何かを感じたのか、再び登って来た方向に引き返して樹林の中に去っていった。久し振りにカモシカに出会う。山で野生動物に出会うことは大いなる収穫である。

遠望はしていたが、王ヶ頭山頂は電波回線中継アンテナの林立群で少々うんざりしたが、眺望は抜群、眼下には日本列島を南北に二分する重要な地溝帯（フォッサマグナ）、その構造線上に発達した松本盆地―諏訪盆地―甲府盆地と続く盆地列、遙かなる富士谷を望みその東縁なる蓼科・八ヶ岳・霧ヶ峰の火山群、西縁には赤石・木曽・飛騨山脈なる高山性山地の名峰、北方に

は戸隠・黒姫・飯縄火山群・白根・浅間火山群を望み、三六〇度の視界はその始まりと終りを知らず。

帰途、三角点の位置を確認すべく構築施設の周辺を巡るところ地上約五〇センチ露出、欠けて傾斜している標柱石を見つめる。これまで多くの三角点を見てきたが、このように損傷した標石は見たことがない。マイクロ回線ネットワークはその地点の選定に当たりこの位置が地形・方位・距離ともに最も効果の高い地点であると聞いたことがあるが。

夜は美ヶ原高原ホテル経営主山本氏のご厚意により特別の間に晚餐、ジンギスカン焼を囲み、鹿刺しをはじめ数々の山の味覚を賞味する。松本の銘酒「笹の誉れ歳時記」を傾け、雑談に興ずる。美酒が機縁となって山本氏のお世話で翌日（笹井酒蔵の見学を取り計らっていただいた）。

五月二十九日、山の朝は早い。五時に目が覚めた。今日もよい天気である。窓の夜露を払って眺めると、蓼科山をはじめ八ヶ岳連峰・富士山・鳳凰山・甲斐駒辺りまで視界に入る。早速スケッチを始める。

ホテルを八時に出発。今朝もまだ放牧の始まっていない茫々たる亜高山性草原を進む。塩くれ場をへて茶臼山二〇〇六・四メートルに向かう。木曽谷の向こうに御嶽山がひとときわ麗しい。茶臼山頂上で東京農大ワンゲルパーティーの一隊に出会う。盛んな食事中である。

この山頂の三角点も柱石のまま引き抜かれ、岩塊に立てかけてあった。昼食としては早過ぎるが、思い思いの軽食をとり、ゆっくりとコメツガ、シラビソの優占する尾根筋を下る。途中で山ウド・ワラビを採集しつつ歩き、扉峠に出る。

峠のドライブインに一時過ぎに到着、ビールで乾杯、渴きをいやす。

今回の集いは天候にも恵まれ、中部山岳地帯を総括的に大観することができ、大変有意義であった。タイミングよく迎える車が来た。日本酒を嗜む者にとって旅先の地酒を味わい、その酒蔵を訪ねる機会を与えられたことはまた格別の喜びである。今その酒蔵へ向かうべく、山を後にする。参加者六名、犬一匹。

（賀嶋増造）

次代に残そう美しい山と溪

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



カット 中村あや

名誉会員に推薦されて

孫 慶錫

その晩、東京から国際電話で突然「おめでとーございます」といわれた。何がおめでたいのかと聞いたら、JACの名誉会員に推薦されたとのことである。びっくりしたが、うれしかった。実はその日の昼頃、イタリアで開かれた九四年度国際映画祭のドキュメンタリー映画部門（五十一カ国参加）で、私が撮影台本を書いた「雪岳山と人」が栄誉の金メダルに入賞した、という知らせがあったのである。今日という日は、二重の喜びが重なりあったようなものだった。

それから二週間後、ソウルではアジア山岳連盟発足の総会が開かれ、JACの藤平正夫会長も来韓されたが、このことには一言も触れられなかった。聞くわけにもいかなかったが会議が終

わり、一週間後JACから公式の通知を受けたのであった。慌たしい師走をひかえた十一月のことである。

今私の書架に三冊の本がある。これは一九六一年から昨年の十二月までに来韓した日本登山隊の訪韓計画書と報告書などを集め、製本した三十三年間の資料集である。ざっと二百隊は超えており、北は北海道から南は東九州に至る、各山岳グループの山の友人たちの記録でもある。

考えてみると、あの韓国戦争のとき、東部戦線の塹壕で田部さんの『山と溪谷』を読んでいるのを、日本の従軍記者に見つかり、彼を通じて「山溪」の川崎隆章氏と文通が始まった。休戦後は母校のソウル大・文理大のOB山岳会を創立して、初代のリーダーとなり冬の五台山、漢拏山、雪岳山に初登頂を果たした。その記事を二、三回「山溪」にも載せてもらった。確か、一九五六年頃と思う。

その後一九六一年、外交使節の一員として訪日し、日本外務省に案内してもらって訪ねたのが、お茶の水のJACのルームであった。山荘風の建物に山の本がぎっしり詰められていた。その晩、日高信六郎会長をはじめ、田部重治、折井健一、交野武一、三田幸夫、加藤泰安、そして川崎隆章氏らと交えて、初めての夕べの会合を持った。それから折井健一氏の紹介の手紙で、四季を問わず週末には日本隊の世話をすることとなった。これが三冊の本になったのである。

私もまた、北ア、南ア、富士山、立山連峰、丹沢、そして秩父山塊に登った。またJAC六十周年には、正式の韓国山岳会の代表として訪日、登山をもした。そのときは韓国山岳会の常務理事をしていたので、JAC入会の誘いは延ばしていた。そして、一九七四年、クラブの現職を一時休むときに、折井健一、百瀬舜太郎両氏の紹介でJACに入会したのである。おかげで多くの山の友人に囲まれ、楽しい三十三年間であった。数年間にわたって日本登山学校の講師として呼ばれたこともあり、時折、年次晩餐会にも出席した。

最近はいよいよA出席、アジア山岳連盟結成の世話役など、身辺が賑やかになったが、このたび伝統あるJACの名誉会員に推薦されたのは、これでも

うこういう賑やかなことはそろそろ控えてほしい、という意味だろう。あるいは、JACという人垣があるからもっとしつかりやらない、という掛け声かとも思い迷っている。

ところで、先の晩餐会では光栄にも「富士」のテーブルで皇太子様の隣席に座り「殿下は韓国の山々へ是非お出でくださいませんか」とお話ししたのである。橋本龍太郎さんは「これはまた大変だ」という表情である。藤平会長はただにこにこされるばかりである。

今年は韓国山岳会の五十周年、JACは九十周年である。一九七〇年の韓国山岳会二十五周年記念日には、大森薫雄、ドクターら三名の祝賀来韓があった。これではまた、賑やかなことを控えるわけにはいかなそうである。

マッターホルン登頂記 —かなえられた私の夢—

金子康一

「先生、右手はその岩の端にかけて、左足はそのクラックに突っ込んで」「こは豚のしっぽにザイルを巻いて」「ガイドの指示が次から次と頭の上から飛んでくる。ヘルメットにヘッドランプを点け、ガイドとアンザイレインしてヘルンリ小屋を出発したのが午前四時。

海外の山

南極点スキー・ソロ

江本嘉伸

南極大陸は、起伏の大きな大陸である。たとえば、一九九四年暮れ、極点までの「ソロ・スキー・マラソン」を実行した中村進（四八）のスタート地点、ロンネ棚氷ハーキュリー・インレットの標高は二〇〇メートル。南極点の最高は二八三五メートルだから、平らに見えても、実際はゆるやかな登りを進むことになる。

「探検とか冒険ではなく、自分の筋力を頼りに、一種のレクリエーション・スポーツとして南極をやってみたかった」と、そもその動機を中村は説明する。ドーバー海峡の横断に挑戦した大貫映子を船上から追った時のイメージに近いという。

無論、支援組織と資金があってできることだ。北極点、チョモランマと地球の二極にテレビ・カメラマンとして立った実績がそれを助けた。中村のスキー行を、テレビ・チームが同行撮影することになった。

一九九四年十一月十三日、四人の

支援隊の乗る二台のスノーモービルに伴走されて出発。それぞれ二台の橇がつながれ、食料、装備とドラム缶十二本の燃料が積まれている。

スキー・マラソンといっても、氷点下二〇―三〇度の中、強風と戦いながらの行動である。長丁場を乗り切るため、中村は五キロをワンピッチとする独特のインターバル走法で進んだ。

「毎日五キロか十キロごとに大きなうねりがやって来るんです。それの一つ越え、二つ越えしながら登ってゆく。それに極点までは、最初から最後まで向かい風だから、やはり楽ではないんですね」

スノーモービルと離れ、一人で行動する時間も多かった。そんな時、さまざまな幻想に襲われた。

「子供の頃のこと、親が亡くなった時のこと、岩下さんを病室に見舞った時のこと、・・・いろんな人が現れてくるんです。時にはひとり大声で笑いながら、時には大声で泣きながらスキーで走っている」

犬橇での北極点到達（一九七八年）、チョモランマ頂上からのナマ中継（一九八八年）はじめ、中村は二十年以上もドキュメンタリストの岩下莞爾（九三年十二月十九日、五十八

才で逝去）と共に行動してきた。

十二月二十一日、ついに南極点到達、ノルウェーのアーリン、カッゲに次いで中村は世界で二人目の「三極点到達者」となった。スタート地点から一二六キロ途中四日間の休養日を含めて四十日かかり、一日平均では三四・七キロを走った。

極点では、アメリカの観測基地の人々の歓迎を受けた。ありがたかったが、そこに建物があり、人々がいることが何とも不自然に思えた。

スノーモービルでの帰路、ノルウェー女性、リブ・アーネセン（四一）が一人橇を曳いて極点に向かう所と出会う。見事、女性初の南極点単独到達をやったのけた。他に、腕のない冒険者をまじえた三人も、無事極点に到達した。最高峰、ビンソンマシフは金さえ出せば専従のガイドが待機している。南極は、そういう時代になった。



前号の本欄で書いたハン・テンゲリ「日本人初登頂」の地方新聞の誤報について、登頂したご本人から丁寧な手紙を頂いた。本人は新聞社にそのようなことは一言も言っておらず、訂正もされないことを気にしている、とのこと。付記させて頂く。

あれから一時間あまり、東の空が明るくなるにつれて、傾斜は次第に増して体中が緊張感にあふれる。恐怖感が湧いては登れない。頂上までは下を見ないことにする。這いつくばったような格好でジワジワと体を上に持ち上げる。やがてソルベイ避難小屋に着く。こんな断崖によく建てたものだ。「先生、五分間だけ休憩」、ザックからテルモスを取り出して紅茶を飲む。「ここからいよいよ本番だから気をつけて!!」日本ではもちろん私が登ったこともないような岩場が続く。すぐ横はゾッとするような北壁。岩に雪がつきはじめてた途端、ガイドの声。「こんなところだけれど俺が確保しているから心配しないで早くアイゼンをつけて」冷や汗が出るような場所だ。間もなく固定ザイルが現れる。足のアイゼンをきかせ、両手に満身の力を込めて体をずり上げる。とても長く続かない。「ちょっと休ませて」とガイドに声を掛けて不自然な体勢のまましばらく腕を休ませる。「ヨシ!!」気合いを入れてまたよじ登る。ザイルが次から次と続く。やっと終わると今度は雪の壁。先行の登山者が落とす小さな雪の塊が飛んでくる。酸素もだいぶ稀薄になったようだ。肩で息をしているのに気がつく。やっと頂上近くのキリストの像が見え出す。「もう少しだ、頑張れ!!」自分自身に

言い聞かせながらステップを刻む。

九時十分、ついに頂上に到着。「万歳」四四七八メートル、ヘルンリ小屋からの標高差一二〇メートル。我ながらよく登ったものだ。イタリア側からの頂上には十字架、紺碧の空に浮かぶ白い雲、三六〇度の展望、遙かにブライトホルン、モンテローザの雄姿……。昨年のモンブランに続いて青春時代から描き続けた夢―ヨーロッパ・アルプスを代表する二つの山の登頂―はリタイア後六年にしてやっと達成することができた。

俳句

鎌倉アルプス

小林碧郎

大寺の谷戸をのぼりぬ冬紅葉
冬うら尾根の矢竹に光る海
笹鳴や百八やぐら日をためて
冬の蜂土牢いまも太格子
木守柿照るは大蔵幕府跡
大銀杏落葉つくせり磴のもと
大仏の背のまろやかに日向ぼこ
サーファーの海燦然と冬日入る

(平成六年懇親山行十二月四日)

玉山登山

中村あや

一九九四年十月十八日午後、JAC'94玉山登山隊は、台北の帝后飯店に集合した。メンバーは中村純二(隊長)、赤羽昭夫、長谷川龍雄、堀井昌子、中谷絹子、石井恵美子、中村あやの七名である。中正機場には李剛龍国際連絡組長をはじめとする中華民國山岳協会の多勢の方々が出迎えてくださり、夜は、蔡禮樂理事長、黃鑫羽副理事長、陳守珪秘書長も出席され、盛大な歓迎パーティーが開かれた。嚮導員の張さんと林さんの紹介もあり、テーブルにはお酒とご馳走が次々と並べられた。今回の登山はたまたま大垣山岳協会の玉山登山と日を同じくしたので、パーティーもチャーターバスも全て行動を共にすることになり、大変賑やかであった。

翌十九日朝、曇り、大垣隊十名(隊長山本照彦氏)JAC隊七名と嚮導員二名をのせたバスは、帝后飯店を出発した。椰子や檳榔の茂る眺めを楽しみつつ、蔡さん差し入れのおいしいちまきをいただく。南下するにしたがい少し晴れてきて、西螺のドライブインでバスから降りると、外は南国の暑さであった。斗南で昼食の後、緑濃い登り

道に入る。高度一五〇〇メートルあたりでガスが濃くなり、お茶畑が広がり製茶の店がたくさん目につくようになる。夕方自忠に着き、入山手続きをした後、民宿に入る。外は濃い霧が立ちこめていた。

二十日朝も曇り、朝食をすませ五時にバスで出発、二十分で標高二六〇〇メートルの登山口に着き、一面の雲海を眺めながら広い車道を塔々加峠まで歩く。ここからは山腹につけられた山道を辿る。草が茂り、キオンやハコグサも咲いている。やがて前方に鋸歯のような南玉山や小南山の岩峰が見え、展望小屋からは初めて玉山を仰ぐことができた。道は大変よく整備され、ゴミ一つ落ちていない。鋭く切れ落ちた岩壁と見事に繁った針葉樹林の眺めは、とても三〇〇メートルの高山のものとは思えない。十二時十五分、三五〇メートルの排雲山荘につく。荷物整理の後、数人で藪を分けて背後の西峰稜線まで登ったが、それまで垂れこめていた雲が切れて玉山頂上が姿を見せ、続いて北峰も見え、つかの間の眺めを楽しむことができた。夕方、山荘前庭で各自炊事をし、賑やかな夕食となる。二十一日午前三時起床、快晴である。朝食後、張さんを先頭に、大垣隊の高木崎男JAC岐阜支部長がペースメーカーを勤め、明るい月光の下、ジグザ

グ道をゆっくり登りはじめる。森林限界を過ぎ、最後の急斜面をよじ、六時五分、三九五二メートルの玉山頂上に着いた。このとき、ちょうど太陽が顔をだし、一同歓声を上げた。雲海の上には、雪山、秀姑巒山、関山など三〇〇メートルを越す山々が並び、近くには、北峰、東峰、南峰をはじめ南玉山や小南山がそそり立つ。四十分近く素晴らしい大観を楽しんだ後山荘に戻り、ただちに下山。塔々加峠までヒナコグメグサ、紫や黄のリンドウ、ヤマジノホトトギス、ナデシコ、センブリ、コウゾリナなど秋の花々が美しかった。その夜は台北のレストランで登頂を祝して打ち上げ会を行った。

今回は快晴に恵まれて玉山の頂上に立つことができ、誠に幸いであった。ただH隊員だけ持病の背中が痛みが起こり、排雲山荘から引き返されたのは残念であったが、H隊員は来年の登頂を期して計画を立てておられる。

この登山に関し、さまざまのお世話をいただいた中華民國山岳協会の皆様、ならびにJAC海外委員の木村氏に心から感謝申し上げる。

ウエストンと箱根の大地獄

田畑真一

明治二十六年八月、ウエストンは立

詩

神々の座

奥野道治

月の光に照された白き神々の座は
深い眠りの中に鎮座し
黒々とした鋭さをみせた岩壁の亀裂を
僧衣の襷にも似せて
屹立する聖なる山はマチャプチャレ
青白いモレーンを
包みこむようにして

深まりゆく夜のしじまの中に
青磁のような下地に渾沌の
色調を秘めた

聖職者はアンナプルナ南峰
山の精気がただよう中を
青白い氷雪のうねりをみせて
深い沈黙を守りつづける
白い巨象はダウラギリ
喜びも悲しみも欲望も生滅も
全ては月下の岩石に氷結して
太古からの殿堂は深い眠りに
沈潜する

(ネパールヒマラヤの山旅から)



山方面に向かった。そして首尾よく立山の登頂に成功。その後、さらに歩を進め、火山地形の大地獄へとやってきた。ウエストンは「これを大地獄と名づけているのを見ると、この土地の人々がここをどんな風に考えているかがよく解る。在留外人によく知られた箱根地方のこれと同種の有名な土地が、やはりかつて大地獄と呼ばれていた。しかし数年前、天皇陛下(田畑注、明治天皇)がこの地に行幸になった時、これを大涌谷という一層口調の良い名にお変えになった」(『日本アルプス―登山と探検』と述べた。

しかし、箱根の大地獄の名称が改められたのは、ウエストンがいうように「数年前」ではない。これは明治六年八月のことである。箱根の宮ノ下・奈良屋についての記事中には「明治六年(一八七三)には八月五日より同月二十八日迄明治天皇、皇后両陛下御駐蹕の栄光に浴した(中略)両陛下には御避暑の間、芦ノ湖に御清遊、大涌谷の噴気孔を御覧になられた」(『箱根温泉史』)とある。ウエストンの聞き違いなり、勘違いなりが考えられる。ただ、「一層口調の良い名に」に見るように、明治天皇への敬慕の情については理解ができる。明治天皇びいきといつては失礼にあたるだろうか。何はともあれ、ウエストンは明治三十八年

三月、自著『日本アルプス―登山と探検』と風景写真とを献上(「W・ウエストン年譜その2」、『山岳』第八十三年)している。

とはいえ、私は大涌谷という名称も、当時においては万遍なく使われていたとは考えにくいと思う。たとえば明治二十七年三月に現地を訪れたベルギー公使夫人E・M・ダメタンは「硫黄泉の噴出口大地獄に向かって元氣よく出発した」(長岡祥三氏訳『ベルギー公使夫人の明治日記』)と述べている。明治二十年四月、ベルツが宮内省に提出した意見書には「箱根山脈中大地獄即ち大涌谷」とある。また、大正十年四月発行の『神奈川県地図』(国会図書館所蔵)には「大地獄」の表記を見る。

会長への手紙

山口俊輔

この秋、ひとりの新入会員から一通の手紙が藤平正夫会長宛に届けられました。平成七年が九十周年の節目となる当会にとって、会員の増加、平均年齢のアップ、若年層の減少、中高年層の増加など、時代の変遷とともに組織内の変化が著しい現状です。この手紙にはそうした「変遷」の悩みが浮きぼりにされています。差出人の了解を得

て、この手紙の内容を一部披露します。皆さんはこれを読んでいかに考えられるでしょうか。

「涼秋の候、山々からは紅葉の便りが届く季節となりました。会長様に面識もなく、新入会員であります私が、このような手紙を差し上げる失礼をお許しください。

私は現在、A県の高校にて教鞭をとっており、地理を担当しております。年齢は三十七歳。中学時代より山に憧れ、高校入学と同時に山岳部へ入部、故郷の山々をベースに北ア、南アへと活動のエリアを広げていきました。中学時代に陸上部に籍を置き、くる日もくる日もトラックを走り続けていた自分にとって、川の源流部を溯行する山行や夏の北ア・濁沢カールの雪上訓練などは、自然の営みの素晴らしさ、厳しさなど、下界や他のスポーツでは得難い貴重な体験を積み重ねてくれました。顧問との人間関係も四六時中の共同生活が続くことにより、濃密なものとなりました。人間形成の面で最も大切であると思われる青年期に、山と出会うことのできた私は、それだけで幸福な人間であったかも知れません。大学は京都の学校に入学しましたが、やはり、クラブに入り、北山、比良の山々から北海道、九州へと山域も高校時代よりはるかに拡大していきました。山行形

態も泊数が増え、岩登りから冬山へと領域も拡大していきました。

大学を卒業と同時に他の県の高校教諭となり、幸運にも山岳部の顧問になることもできました。以来十年間、教壇に立つかたわら、生徒とともに、丹沢や奥多摩、八ヶ岳や那須連山へと山行を重ねていきました。K県の高校在職中には、インターハイにも出場させることができ、私も高体連の登山部門の役員として迎え入れていただくこともできました。その間、文部省登山研修所や剣沢前進基地での集団登山指導者講習会、箱根で行われた全国遭難対策協議会等々、数々の貴重な体験を積むことができました。(中略)

私自身の登山、あるいは生徒たちが山に登っている姿を眺めておりますと、山はそれ自身の持つ力強さと包容力、時として人をはねつける厳しさを登山者を感じさせると同時に、登る人間の内なる世界を拡大させ、思惟する自分を形成していく不思議な力を秘めているような感じがします。多感で自意識過剰気味な十代に山に叩きのめされ、新たな自己を模索していくことは、人間形成に大変な影響を及ぼす行為であると思っています。(中略)その後、私は郷里に戻り、現在は山とは全く畑違いの高校の進学科に在籍しております。今はプライベートな山行しかでき

なくなりましたが、かえって最近の登山を客観的に見直すことができるようになった気がします。

近年、とみに中高年の方々の山に登る姿が増えた反面、十代・二十代の青少年層の姿は激減しています。大学の山岳部など、危険、きついというイメージが付きまとうのか、その存続が危ぶまれているところが大半です。山は踏み入るところではなく、車でアプローチし、温泉につかり、風景の一部として仰ぎ見るところとしてとらえているような、そんな感じがしています。

山の持つ魅力の真髄を体験してもらえたら、という思い以上に私が危惧しておりますのは、日々教壇に立ちながら感じる彼らの人間の根底にかかわる意識の変化です。互いのプライバシーを尊重しようという認識があるかどうかは別として、人間関係はそこそこにつき合い、互いの内面に深入りせず、肉体に負荷をかけることを嫌い、自己に不利益な状況が生ずると矢面に立つことから回避しようとする、そんなタイプの青少年が確実に増えているような気がするのです。

私も、彼らが自らそうしているのでなく、時代が、日本の現状がそうさせているのだとは思いますが、彼らの未来を思うとき、人間の一番大切な生きを生きているのに、このままでいい

のだろうか、と不安な気持ちを抱いてしまします。部活動に参加する生徒も確実に減ってきています。学校が終われば、塾通いか、ゲームセンター、アルバイト。あまりにももったいない話です。

登山の持つ魅力。それは自然という大きな存在に対して、いかに叡智を絞って近づいていけるかということと同時に、その過程の中で、内なる自分の内面世界をいかに広げ、高めていくか、その二面性に求められると思います。これほど科学的であり、哲学的であり、ある種、宗教的なスポーツは、私は過去に出会ったことがありません。

長々とひとりよがりなことを書きましたが、高校以来、永らく慕って参りました顧問の先生が籍をおかれていらっしゃる会に入会でき、大変嬉しく思っております。今後は会員として恥じぬよう、自己研鑽に励むと同時に貴会の活動に、積極的に参加したいと思っています。

最後に、会長様。今、日本山岳会に登山を主体とした学校の設立、もしくはそれに近い活動の計画がありではありませんでしょうか。同じようなお考えの方がいらっしゃれば、私も是非加えさせていただきたいと考えております。(中略)フランスの国立スキー登山学校のように、自然を愛し、健全な精神の持てる青少年を育成する場が

——黎明期登山へのロマンを探る…… 『ウェストンの信濃路探訪』

——山々への賛歌
田畑真一 著

日本アルプスの父、ウォルター・ウェストン。宣教師である彼と、山里の人々とのふれあい、素朴なエピソードを一挙紹介。

定価1500円(税込)

(株)センチュリー 〒231 神奈川県横浜市中区住吉町3-29
☎045(641)6711/FAX 045(641)6713

日本にあってもよいのでは、と常々考えております。山に鍛えられ、育んでもらった恩返しをどこかで次の世代に伝えたい、という気持ちを常に抱えています。私は妻があり、そして二児の父親ですが、計画があれば、いざ鎌倉の気概を持って馳せ参ずる覚悟であります。会長様に一面識もない私ですが、いざれお考えを披露くだされば幸いです。山を志す者として未熟ですがこれからも全国の諸先輩とともに力を合わせ、会の発展に微力ですが尽くしたい、そんな気持ちでいっぱいです」と結ばれていました。皆様のお考えも伺いたいものです。

図書紹介



カット 中村あや

薬師義美・編

『新版・ヒマラヤ文献目録』

本書は私家版発行より二十年余、第二版(白水社旧版)発行より十年が経過したのを区切りとして、再び大幅な増補改訂を行ったものである。

一九八〇年代に入って中国奥地への旅や登山がかなり自由になり、それにとともに報告書や紀行が次々に刊行されたが、もちろんこれらの出版物も新版に加えられている。また今回新たにロシア語の登山と探検の文献が八十三点、付録として掲載された。収録されている欧文・邦文の図書数は合計九千三百九十八点で、編者が目にしていないう文獻も多いと思われるが、数では第二版の二倍となっている。さらに、図書名一覧、総合索引などに一段と工夫が凝らされ、世界に通用するように仕上がっている。編者三十年におよぶライフワークの昇華といえる。

一九九四年 白水社刊 B5判 一
三二〇ページ 定価五万八千円 特
価五万五千円(一九九五年四月末日
まで) (田村俊介)

株式会社クボタ発行

雑誌『URBAN KUBOTA』

(アーバンクボタ)

一企業のPR誌とは思えないユニークな雑誌である。アメリカ合衆国のナショナルジオグラフィックを思わせる品格を備えた装丁であり、かつまたそれに匹敵し得る内容を備えたものである。ちなみに送られてきたバックナンバーの特集タイトルを列記してみよう。NO.15『火山/日本の火山/火山活動と人間生活をめぐって』、NO.28『古瀬戸内海と瀬戸内火山岩類』、NO.31『北陸の丘陵と平野』、NO.33『八ヶ岳』となっていて、五〇〜六〇ページにわたるオールカラーの写真と図表つきでビジュアルに表現されていて楽しい。内容的にも、地質学、地形学、古生物学などの知見を備えたもので、学術雑誌に勝るとも劣らない高度さである。

とくにその『特集・八ヶ岳』号は、表紙写真に連峰の山座同定を施したものを使っていたりする。中では航空写真の立体視できるものを載せるなど、

編集としての工夫もなかなかあか抜けたものである。

これから毎号を、本会会員であり紹介者でもある松沢節夫氏の友人・同誌執筆者の熊井久雄大阪大学教授から定期的に送ってくださるということ、山の周辺に関する豊かな情報源がまた一つ増えたことになる。(山口祐一)

石田稔郎・著

『韓国の自然と山』

東京都山岳連盟とソウル特別市山岳聯盟との間で姉妹結縁を締結したのを機会に、登山交流が始まり、その中ですっかり韓国の魅力の虜になってしまった著者が、十年余りの間に何十回もの訪韓を重ね、四季を通じていろいろなルートから主要な山を登った結果の集大成である。第三章に「魅力の名山―十五峰」のタイトルで各山の位置・交通・登山ルートなどを、具体的、また最近の状況も加味して書いている。まさしく韓国登山のガイドブックである。著者は前書きで「日本の国内には韓国の山の資料が少ない。その不備を埋めようというのが私の願いである」と書いているが、その願いを十分に果たしていると思われる。

一九九四年十月 韓国登山同好会発行 一九〇ページ 二千五百円

(茂見 猛)

書籍受入報告(1994年12月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈・購入
ビジャイ・マッラ	神の乙女クマリ(現代ネパール長編小説)	279pp/19cm	新宿書房	1994	出版社寄贈
熊谷樞	北海道の山を滑る	218pp/19cm	白山書房	1994	出版社寄贈
日本山岳会東海支部(編)	名古屋からの山なみ(改訂版):東山スカイタワー基点	273pp/22cm	中日新聞本社	1994	編者寄贈
日本山岳会京都支部(編著)	山城三十山	194pp/20cm	ナカニシヤ出版	1994	著者寄贈
広島山稜会(編)	峠:広島山稜会35周年特集号	1186pp/26cm	広島山稜会	1994	発行者寄贈
G.L.マロリー(著)・田中純夫(訳)	エヴェレスト 1921年:1922年	177pp/19cm	日本山岳会越後支部	1994	訳者寄贈
国学院大学山岳部OB会	あしびき―追悼集―	369pp/22cm	国学院大学山岳部	1971	松永敏郎氏寄贈
台湾・高峰遍歴隊'94(編著)	南湖大山登山報告書(1994.4/29-5/8)	22pp/27cm	台湾・高峰遍歴隊'94	1994	発行者寄贈
Rolston, Holmes	Conserving Natural Value	259pp/23cm	Columbia Univ. Press	1994	山本良三氏寄贈
Ruse, Michael	The Darwinian Paradigm	299pp/22cm	Routledge	1993	山本良三氏寄贈
Gould, Stephen Jay	Ever Since Darwin: Reflections in Natural History	285pp/22cm	Norton	1977	山本良三氏寄贈
Berra, Tim M.	Evolution and the Myth of Creationism	198pp/22cm	Stanford Univ. Press	1990	山本良三氏寄贈
Pimm, Stuart L.	The Balance of Nature?	434pp/24cm	The Univ. of Chicago	1991	購入
Weston, Walter	A Wayfarer in Unfamiliar Japan	215pp/20cm	Methuen & Co. Ltd.	1925	購入

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

福岡支部

五月の屋久島登山を視野に

●鬼ヶ城山親睦登山

七月三十一日、二十六名が参加して、下関山岳会の山小屋「くるみ小屋」で親睦会を行う。岡本委員（下関山岳会会長）の指揮のもと、地元の会員が一切の世話にあたる。親睦会前に委員会を行ったが、時間に余裕があった人たちは、近くの温泉へ汗を流しにゆく。

親睦会は、山海の珍味にビールをはじめ種々のアルコール類、そして時を忘れ和やかに話が続く。ペランダで月を眺めながら寝袋の会員も。

翌日、さわやかな朝を迎え、朝食後鬼ヶ城山へ。雑木林の中をしばらく歩き、視界が広がってきたなと思ったら、

もう山頂。右手に玄海灘、左手に周防灘と素晴らしい展望であった。小休止後下山。登りにはあまり気がつかなかった急坂がかなりあり、滑らないように気をつける。

下山後、冷たい素麺のもてなしを受け、再会を約して解散。

●全国支部懇談会に参加

当初二名の参加予定であったが、関西支部の要請により七名参加する。北海道から九州まで、旧交を温め、また新たな人たちとの出会いを楽しむ。

●第十回宮崎ウエストン祭に参加

参加者二十名。十一月二日の前夜祭では、来年五月の屋久島自然観察登山への協力を依頼する。翌三日、三秀台で行われたウエストン祭に参加した後、筒ヶ岳登山、下山後流れ解散となる。

●屋久島自然観察登山概要

九州四支部主催による屋久島自然観察登山の概要です。詳細は一八ページに掲載しています。

日程 平成七年五月二十七日(土)～二十九日(月) 現地集合

宿泊 屋久島ロイヤルホテル(安房)

募集人員 六十名

行事 二十七日 シンポジウム
二十八日 宮之浦岳登山(日帰り) 懇親会

二十九日 現地解散
(蔵富幸夫)

熊本支部

秋季例会・筒ヶ岳山行

久々の山行となった秋季例会は、宮崎ウエストン祭への参加をかねて、十一月二、三日、宮崎県高千穂町の五ヶ所高原で行われた。第十回宮崎ウエストン祭、平成六年度九州四支部合同会議、宮崎支部創立十周年記念集会と、にぎやかに三つのイベントがワンセットで実施された。

二日夜は前夜祭に先立ち、宿泊所の五ヶ所小学校体育館で九州四支部合同会議が開催され、屋久島自然観察登山などについて討議された。本部から中村副会長ご夫妻も参加され、スペイン・ピレネーのスライドが上映されて好評だった。三秀台北側の農業改善センターで行われた前夜祭は、神事のこととキャンプファイヤーがたかれ、夜神楽やコーラスなど盛り沢山の出し物で夜半まで賑わった。

翌三日は午前九時から、三秀台のウエストンレリーフの前で、第十回宮崎ウエストン祭が行われた。式は地元テレビ局の取材するなか、例年どおりの式次第で行われ、終了後、祖母山、筒ヶ岳の二班に分かれて記念登山が実施された。当支部参加者の大半は、中村副会長夫妻と共に総勢四十七名で筒ヶ岳に登った。

祖母山から西に延びる尾根の末端にそびえる筒ヶ岳は、山頂に五〇メートルほどの茶筒状の岩峰を突き立て、その特徴ある山容は登高欲をそそる。林道の分岐に車をおいて荒れた林道を歩き、杉造林地の急斜面を登ってやせた尾根のアップダウンを伝い、一時間半ほどで岩峰の基部に出た。一二九六メートルの標高点がある山頂は狭いので、ロープを垂らした岩壁を交互に登攀して往復する。

祖母山を間近に望む雄大な山頂からの展望と、記念撮影を済ませたあと、岩峰の基部の日だまりで、思い思いに弁当を食べて往路を下山した。

(田上敏行)

関西支部

赤目左岸台地を行く

十一月二十七日、近鉄赤目口駅前に集合、バスにて赤目滝口で下車する。

奈良県と三重県との境界にある赤目四十八滝は、まだ紅葉が見頃とあって入り口付近は行楽客で賑わっていた。

自己紹介の後、出発する。車道の両側は色鮮やかなモミジとマツやスギの緑とのコントラストが実に美しい。山道に入って約二十分で龍王大神の祠に着き、今日の山行の安全を祈願する。県界尾根に取り付き、ワンピッチで長

90周年記念事業募金の お願い

マカルー登山隊の出発も間近になってまいりました。また文化事業等の催事を実行するためには多くの資金が必要です。再度会員の皆様の絶大なるご協力、ご支援をお願い申し上げます。



長坂山三等三角点で記念撮影中の関西支部の面々

坂山三等三角点(五八五メートル)に着く。

記念撮影の後、展望のきくところで休憩して、大和高原の山々や遠くにかすんで見える金剛山、大和葛城山などを確認する。尾根道は落ち葉のじゅうたんで靴の感触がたまらない。いったん林道に下り、風をよけて昼食にする。

午後、どこまで続いているのかわからない林道を避けて谷を下るが、イバラに手こずり、朽ちた倒木に足をとられ四苦八苦。しかし、そこは山人間のこと、ヤブコギが楽しくてたまらないらしい。

その上、行く先々で柔らかな陽射しにまぶしく輝く紅葉が見られ、楽しさを倍加させてくれる。

池のところから、室生火山群特有の斜長流紋岩質の黒谷に入る。陀羅瀧、俱呂瀧、不動瀧などのそばを注意してトラバースしながら下る。観光地化された四十八瀧とちがって、ひっそりと自然体そのままで神秘的だ。行場を過ぎると村里も近く、龍口の集落手前でティータイム。お茶とお菓子で和気あ

いあいのパーティーとなる。

今日の山行は、地図の読解力抜群で緻密な計算と、優しい気配りのできる久保三朗リーダーだからこそコース充実感にひたりながら、皆満足そうに足どりも軽く、夕暮の道を三本松の駅へと急ぐ。集落の道端には早くも、色とりどりの葉ボタンが植えられていて、目を楽しませてくれた。駅前にて解散。参加者十九名。

(先水美智子)

山形支部

初冬の温海岳山行

恒例の山形支部晩餐会を十二月十日温海温泉・羽越荘で開催。ビデオによる山行などの報告の後、海の幸がお膳にあふれるほどの料理と、参加各人のスピーチを中心に、懇親会を盛大に行なった。

翌十一日は温海岳(七三六メートル)登山。一行は二班に分かれ、車で頂上まで行く組、散策路を歩いて登る組が同時に羽越荘を九時に出発する。温海川に架かる月見橋を渡り、支流右岸にのびる杉木立の中を抜ける林道をしばらく登ると、間もなく散策路に入る分岐点だ。沢を横切りながら登る道は、初冬の冷気が肌をなで、カサカサと落葉のささやきを聞きながら、やがて二つの沢が滝となって合流する二ノ滝に

到着する。ここから上流には糸滝・三ノ滝と連続し、規模は小さいけれども登る者の目を楽しませてくれる。また曲折する登路の沢には、苔むした板橋が数多く架けられ、熊野神社奥ノ院の登拝者の多かった往時が偲ばれた。

三ノ滝上部に達すると、周囲の木立も落葉し、視界が開け、梢の間から日本海の美しい海岸や、海上に浮かんでいるかのような栗島が眺望された。

やがて散策路はN.T.T.の通信施設に通じる車道に出会う。数日前に降った雪が残っていて、路面は至るところ凍結していた。車組はすでに下山していたが、足組は十一時、雪を踏んで頂上に立った。奥ノ院の鎮座する頂上は、植林された杉木立に囲まれ、小高いところに三角点があった。日本海の潮風をまともに受ける頂は、風倒木や立ち枯れも多くちよつと淋しい。

温海岳は標高こそ低いが、渺々たる冬の日本海をはじめ、白銀をまとった鳥海山、月山、そして日本国(五五五メートル)やブドウ峠に連なる山々の展望が素晴らしいところである。

穏やかな小春日和といっても頂は風も冷たく、記念写真に収まり滞頂十五分で下山の途についた。数日前までの雪もほとんど消え、用意したワカンもついに使わずじまいの山行だった。

(阿部勇作)

創立90周年記念事業募金応募状況

(1995年1月5日現在)

標記の募金のご協力をお願いしたところ、早速多数の方々からの応募をいただきました。

会報に逐次ご芳名を掲載してお礼に替えさせていただきます。(敬称略)

累計 519 人 / 1,536.2 口 / 7,681,000 円

● 20口 (100,000円)

橋本龍太郎

● 10口 (50,000円)

重廣恒夫 中島伊平 本田誠也
原徹 木戸繁良 橋本清

● 6口 (30,000円)

山本宗彦 林田正幹 吉永英明
石川史郎 今村正二 正橋剛二
國學院大学山岳部OB会 鈴木
羊三 中沢真二 渡邊雄二 川
崎巖 増田昌司 濱野吉生 溝
口洋三 小須田喜夫 片岡博

● 4口 (20,000円)

阿部和行 小松原一郎 佐藤正
樹 大橋克也

● 3口 (15,000円)

柳下棟生 三鍋久雄 牧野千歳

● 2口 (10,000円)

近藤裕 麦倉啓 浅野初子 北
山久雄 大野秀樹 山崎幸和
佐藤彌右衛門 木村定昭 新田
隆三 小駒山人 大洞陽一 馬
場博行 小野岳 田辺治 松原
尚之 谷川太郎 岡本憲 竹内
洋岳 荒井俊彦 小倉厚 平野
明 鈴木捷夫 辻橋明子 開発
秀三 飯寄忠邦 浜田文二 滝
沢ちよ子 諏訪弘 北原秀介
高橋聡 (計4口) 小島千恵子
松尾美貴子 古賀正浩 長谷川
雄助 沖允人 坪山淑子 山本

晃弘 坂口三郎 森谷虎彦 田
中太門 金井哲夫 小田真道
掛本芳成 栗野光夫 伊達忠雄
湯浅充泰 新村貞男 池田知幸
八木原博子 八木原暁明 伊藤
寿男 伊藤裕泰 高澤光男 内
藤正司 岡沢祐吉 伴實 滑志
田隆 政嘉秀一 中山博允 市
川章弘 内藤修 室賀輝男 山
田圭一 妹尾幸雄 妹尾律子
金子康一 石光久仁子 菅野時
子 梶正彦 鷺尾頭 藤江義夫
和田誠一 徳仁親王 渡辺剛
境野俊男 小林英雄 力丸茂穂
藤田靖二 山本光伸 林雄吾
堀井昌子 佐々木民秀 東京慈
恵会医大山岳部 田邊信行 轉
馬博之 笠原健二郎 村木富士
井口正男 川勝弘一 野澤隆一
内藤俊夫 椿居澄子 一谷恭次
郎 中川尚 上野壽一 中谷充
鷺崎好 柴崎徹 伊藤一之 城
島正幸 村田正春 錦織英夫
高橋一雄 大島秀夫 岡本如夫
西田哲彌 田中重輔 高原三平
松原靖 岩佐邦彦 山下京子
明大体育会山岳部 佐藤藤一郎
高橋治 松澤フサ子 松澤博志
中原寛 藤野欣也 鈴木聰 坪
井圭之助 石澤六郎 土橋進一
寒河江朋男 平野義明 千谷杜

之助 土合敦彦 福田光子 水
野公男 藤内英夫 小林勝之
渡辺欣次 甲斐良治 原篤司
山下静江 鶴見敏彦 堀了平
石田好子 二木節夫 岸栄 刈
屋敏彦 近藤宏 中川和道 和
波久基 谷正雄 岩淵泰郎 黒
沢通子 今井友之助 阿部慎二
大橋基光 杉田博 江村真一
近藤暉 鈴木松三 鳥居亮 真
田匡三 鈴木嶋夫 菅靖夫 鈴
木敬吾 大塚玲子 川合周 石
田国夫 嵯峨野宏 北沢昌永
坂井美江 新井浩 村田省一
小池英雄 杉田和子 久保優
久保義明 近藤保人 桃井雅弘
岡田光行

● 1口 (5,000円)

有賀幸子 中村一雄 森田暁
北島光子 高澤英雄 高澤佐恵
子 小原晴子 勝山康雄 足立
英二 柴田篤志 松井正 石坂
良一 山田硅二 野田福五郎
寺本昭一 綿引安人 大宮求
伊藤博夫 丸尾龍一 本間一人
足立みなみ 山田暁 今井京子
内田玲子 塚本正利 今木良彦
田中幸男 山田昭一 宗實二郎
宗實慶子 三嶋隆英 鈴木文司
藤本伸明 岡本丈夫 清水芳彦

海外情報

● '94ボードマン/タスカー賞はソマーズに決まる

10月19日アルパイン・クラブで Dermot Somers の小説集 *At the*

Rising of the Moon に '94ボードマン/タスカー賞を与えるとポイントンから発表された。他4作品を抜いた訳だが、*Mountains and Other Ghosts* が '90B/T賞候補にもなったことがあって、力は持っていたといえよう。

● バンフ・ブック・フェスティバル終わる

ここでもB/T賞に続いて、Dermot Somers の *At the Rising of the Moon* が、環境/文化部門の賞を与

えられた。

Steve Roper の *Camp 4: recollections of a Yosemite rock climber* が歴史/伝記部門の賞Chris Bonington and Audrey Salkeld 編の *Great Climbs* (US版 *Heroic Climbs*) が大賞、Gordon Stainforth の *The Cuillin* が挿絵部門の賞、Graham Pole の *Classic Hikes in the Canadian Rockies* でガイドブック部門の賞をそれぞれ与えられた。(High #145 及び出版社リリースより)

マカルー登山隊支援 トレッキングのご案内

会員の皆様のお陰をもちまして、ようやく未踏の東稜からのマカルー（8486m）登山隊が出発する運びとなりました。偵察隊は藤平総隊長とともに2月15日に中国へ、本隊は3月1日から8日にかけてネパールへと出発します。

さて、先年のナムチャバルワ初登頂の際にも実施いたしましたが、今回も登山隊の登頂予定前後のゴールデンウィークに支援隊を組織したいと思います。予定では、ネパールのカトマンズからチベット側を往復し、マカルーとチョモランマ東面の好展望台であるランマ峠までまいります。途中、高度に対する順応日程なども組み込んでいますし、カトマンズなどの観光や南側からのマカルー遊覧飛行も可能です。会員の方で健康であれば、十分に楽しんでいただけます。ぜひ、皆様をお誘い合わせの上ご参加ください。

日時 1995年4月22日(土)～5月7日(日)
日程 基本日程表のとおり
募集人員 20名(最小催行人員15名)
ツアーリーダー同行

旅行代金 49万円(会員外は2万円高)

主催 [主催] 社団法人日本山岳会マカルー登山隊1995
[旅行主催] 運輸大臣登録一般旅行業第1167号 株式会社アトラストレック

申込方法 直接主催旅行社宛に電話でお申し込みください。

〒160 東京都新宿区三栄町23

TEL 03-3341-0030

FAX 03-3341-9200

担当 浅井武・近藤謙司

申込締切り予定日 3月25日

◆基本日程表

- 1) 4月22日(土) 成田(大阪)～香港～カトマンズ
- 2) 4月23日(日) カトマンズ～ザンムー～ニュラム
- 3) 4月24日(月) ニュラム滞在

- 4) 4月25日(火) ニュラム～シガール(標高約5000m)
 - 5) 4月26日(水) シガール滞在
 - 6) 4月27日(木) シガール～バジュール～カルタ
 - 7) 4月28日(金) カルタ～中継キャンプ
 - 8) 4月29日(土) 中継キャンプ～湖
 - 9) 4月30日(日) 湖～ランマ峠
 - 10) 5月1日(月) ランマ峠～湖～中継キャンプ
 - 11) 5月2日(火) 中継キャンプ～オールドティンリ
 - 12) 5月3日(水) オールドティンリ～ザンムー
 - 13) 5月4日(木) ザンムー～カトマンズ
 - 14) 5月5日(金) カトマンズ滞在(及び予備日)
 - 15) 5月6日(土) カトマンズ滞在(及び予備日)
 - 16) 5月7日(日) カトマンズ～大阪(成田)
- 以上、ご案内いたしますのでよろしくお願い申し上げます。

INFORMATION



◆「ゴラパニ石楠花林保全のための調査」参加募集

自然保護専門委員会

ネパールのゴラパニ峠は、見渡す限りの石楠花林の向こうにダウラギリが望まれる素晴らしい自然環境ですが、その自然が損なわれはじめています。「山の自然学講座」の実践活動の一つとして、保護のための予備調査を計画していますので、興味のある方はご参加ください。

期日 三月二十五日～四月二日

場所 ネパール、ポカラから数日のところ、片道ヘリコプターを利用

指導 池田明彦(植物学) 大森弘一郎(地形調査)

費用 二十九万円

定員 十名

申込 二月末日までに自然保護専門委員会「ゴラパニ係」へ

◆屋久島自然観察登山

主催・九州四支部 主管・福岡支部

屋久島自然観察登山を次のとおり実施しますので奮ってご参加ください。

日時 五月二十七日～二十九日

現地集合、現地解散

宿泊 屋久島ロイヤルホテル

鹿児島県熊毛郡屋久町安房三六四・三五

TEL 〇九九七四一六二〇一一

日程 二十七日 受付十二時～十四時

屋久島ロイヤルホテル 講演会
パネルディスカッション十五時
～十八時、屋久杉自然館(ホテル)屋久杉自然館の往復はバス

使用、約五分) 夕食十九時
二十八日 宮之浦岳登山・五時

三十分出発～十七時三十分帰着
(ホテル)登山口の往復はバス

使用、約八十分) 懇親会十八
時三十分から

二十九日 朝食後解散

参加費 三万円(宿泊費、懇親会費)

昼食代 バス代)

募集人員 六十名

申込 四月十日までに参加費を日本山岳会福岡支部(振替番号〇一七

六〇一四一五五〇三)までお
送りください。入金を確認次第

詳しい案内状を送付します。
問い合わせ先 〒八〇五 北九州市八

幡東区清田一八一九 吉村
方 日本山岳会福岡支部事務局

TEL 〇九三一六五一三六五〇
FAX 〇九三一六五一三六六一

または〒八〇六 北九州市八幡
西区東鳴水一五八 蔵富方

TEL 〇九三一六二二一七二〇七

*ひと月に三十五日雨が降るといわれる屋久島です。雨具は必需品です。

◆会報発行のお知らせ

ジャック93会

会の活動のお知らせや連絡、山行計画の予定等々のため、会報(不定期)を発行することになりました。会員(一

一三七二一六六七)で、会報希望者は「長形3号125×235封筒」に、各九十円切手を貼って、住所、氏名を記入の上(五枚)、山岳会事務局ジャック93会宛お送りください。創刊は四月中旬の予定です。

は四月中旬の予定です。

■会員異動

▼物故

水野裕尚(九二九〇) 6・4・27

門倉賢(六九〇五) 6・11・17

山田明吉(一九四八) 6・11・25

小川雅庸(九四四八) 6・12・7
中河与一(五四〇〇) 6・12・12

▼退会

百瀬健彦(九二五四) 6・12・18

小坂丞(九二六二) 6・
清水孝悦(八三八四) 6・12・31

原田豊一(一一三二八) 6・12・31

ルーム日誌

12月

1日 学生部 指導委員会

2日 資料委員会

4日 自然保護専門委員会

5日 連絡委員会

6日 アルパインスケッチクラブ

7日 青年部

8日 山岳史懇談会 理事会

9日 フォトビデオクラブ

10日 自然保護専門委員会

12日 アルパインスキークラブ 自然

保護専門委員会

13日 二火会

14日 科学研究委員会 遭難対策委員

会 93同期会

17日 土曜会

19日 資料委員会 アルパインスキー

クラブ

20日 自然保護委員会 フィルムビデ

オ委員会
21日 集会委員会 三水会

26日 データ委員会

29日

～ 年末年始休み
1月5日

12月来室者607名

会務報告

十二月定例理事会

日時 十二月八日 十九時～二十時
場所 日本山岳会会議室

【出席者】藤平会長、中村副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、片岡、南川、伊藤、水野、南井、渡邊、溝口、中川、山本、大谷各理事、中島、川崎各監事、神崎、重廣各常任評議員

【委任】嶋原副会長、松浦、堀井各理事、斎藤、湯浅、西村、宮下各常任評議員

◆議事

【審議事項】

一、写真掲載依頼について 小倉

①(株)センチュリーから「ウエストンの信濃路探訪」田畑真一著に写真の掲載依頼をしたい。②平凡社から同社刊行「日本アルプス登攀日記」W・ウエストン／三井嘉雄訳に写真掲載を依頼したい。 承認

二、同好会「SUN燦会」(スケッチの会)について 小倉

三十名で発足した。 承認

三、登山隊後援について 村井 小倉

来年の春、実施の青年・海外・高所でキルギス登山隊に後援を願いたい。

承認
四、マカルー峰登山費用について 大倉

中国に対して、十二月末までに七百五十万円、一月末までに千二百万円を装備その他の費用として支払うが、これは長期積立金より、一部たて替え払いとする。 承認

五、登山隊編成について 村井

来年度に、青年・高所・海外合同でムスターグ・アタ登山隊を出す予定で名義使用の許可を願いたい。 承認

【報告事項】

一、「SFスポーツ・エード」基金の申込について 小倉

昨年までは、春・秋二回の受付けであったが、本年より一回の申込みとなった。受付けの期間は平成七年一月四日～三十一日の間である。対象行事は全国規模のもので一団体交付限度百万円以下、経費の五〇パーセント以内で対象日程は七年四月一日～八年三月三十一日となっている。申込み用紙は事務局にある。

二、募金について 小倉

本日現在、振込み会員数三百五名、受付け金額五百万四千二百円。一月十五日過ぎまでに、経団連に対して企業募金の割り当てを要請する。

三、マカルー峰登山隊について 重廣
晩餐会の際に二十万円の会員募金が

よせられた。梱包作業等、準備は計画通りに進んでいる。

四、年次晩餐会について 中川

十二月三日、新高輪プリンスホテルにおいて、支部長会議を開催、出席支部二十三名、会長、副会長、各理事、監事、評議員二十名で行なわれた。年次晩餐会は五百四十五名が出席。

五、UIAAアジア山岳連盟会議報告書について 大谷

六、「山岳」について 南川

晩餐会出席者に配布。八九年版は五千五百部の印刷であった。

七、会報の広告見通しについて 小倉

八、海外登山基金について 村井

本日現在二隊であるが、締切り間際が増えそうである。

九、平成七年度予算書について 大倉

平成七年度の各委員会予算を二月一日までに事務局宛に提出されたい。

十、日本山岳会組織見直し 小倉

本日までに総務、資料、図書、山研、フィルムビデオ、会報編集、図書管理、自然保護、自然保護専門、青年、指導、遭難対策、高所、学生、海外各委員会と監事から答申書提出があり、未提出委員会も含めて一月理事会の翌日に、臨時理事会で審議(討議)する。

【新入会員】

平尾陽太郎他十七名

■訂正

十二月号・新入会員一一八五四牧野忠夫を忠男に、一月号十四ページ二段目・ナカニシヤ発行を出版に訂正します。

訃報

嶋原副会長死去

一月二十一日午後十二時二十三分、肝腫瘍のため、自宅で死去いたしました。葬儀は二十八日、護国寺桂昌殿で執り行われました。ご冥福を祈り、ご報告いたします。

■編集後記

一月十七日早朝、直下型地震が阪神地区を襲い、死者五千名を超える大惨事となりました。神戸市、西宮市などにお住みの会員の方々、ご無事でしたでしょうか。心からお見舞い申し上げます。(会報編集委員会)

日本山岳会会報 山 597号

1995年(平成7年)2月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102 東京都千代田区四番町

5-4 サンビュウハイツ

四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 藤平正夫

編集人 伊藤 敬

印刷 株式会社 双陽社